

高校生と大学生のピアカウンセリングによる性教育の評価

前田ひとみ

Evaluation of Peer Counseling as a New Strategy for Youth-to-Youth Sex Education

Hitomi Maeda

Abstract : Objectives: In order to develop a peer counseling program as a new strategy for youth-to-youth sex education, we examined whether the program modified cognition and behaviors of sexuality in high school students who had sexuality-related troubles.

Methods: We administered a questionnaire about sexuality to high school students who participated in a peer counseling program under the auspices of the health centre from 2004 to 2006. In 2006, high school students with sexuality-related problems were mainly collected. The questionnaire contained questions about sexually transmitted diseases, contraception, decision-making related to sexual behaviors, self-efficacy and self-esteem. This peer counseling program that provide information about sexuality and negotiation skills in face of sexual pressure, was performed for high school students by university students who had finished the peer counselor course using an empowerment-evaluation approach. The data were collected before and three months after the peer counseling program. For analysis the subjects were grouped into two: group A had high school students enrolled in 2006, and group B had students enrolled in 2004 and 2005.

Results: Group A had 20 students and group B had 93 students. The data were collected from all students before the peer counseling program. Follow-up data were collected from 15 students of group A and 63 students of group B three months later. We were able to analyze paired data from 15 students of group A and that from 62 students of group B from the pre-to post-intervention questionnaire.

About 93% of the high school students had a favorable impression of the peer counseling program. Group A and group B learned comparable level of communication skills, and ability to make good human relations after the program. In addition, knowledge and recognition about their sexuality of both groups were increased. Scores of self-efficacy and self-esteem of both groups were higher after the program compared with scores before the program. The change of scores in group B was much bigger than that in group A.

Conclusion: Peer counseling, which is a new strategy of youth-to-youth sex education, was effective in providing information and empowerment about sexuality for all high school students regardless of having sexuality-related troubles.

Key words : adolescence, sex education, peer counseling, high school students, empowerment

I. 緒 言

厚生労働省では「健やか親子21」の目標のひとつに“10代の性感染症罹患率の減少”を挙げてその対策に取り組んできた。しかし平成18年3月の中間評価では、定点あたりの10代の性感染症罹患率は増加傾向にあり、改善が認められなかったと報告している¹⁾。

思春期の新たな健康教育の取り組みとして、知識を得ることだけに重点をおいた指導型の教育とは異なり、“仲間”同士で学びあうことを目的としたピアエデュケーションやピアカウンセリングが1970年代頃から各国で取り入れられるようになってきた²⁾。A県では2001年からヘルスプロモーションの理念に基づいて、思春期の人々が自己理解を深めながら自分の人生の方向性を見出し、自己実現に向けて主体的に性に関する意思決定並びに行動選択できる能力を高めることを目標に高校生を対象とした大学生によるピアカウンセリングを展開している。これまでに実施したピアカウンセリング講座の評価を行った結果、高校生に対しコミュニケーションスキルの修得と対人関係や自己理解、人生に対する認識を深める効果がもたらされていること、さらに性に関する正しい知識やスキルの獲得だけではなく、性を自分に関係あることとしてとらえるようになり、その結果として性行動の意思決定能力や性感染症予防行動の効力予期も高まっていることが示された³⁾。

A県でのこれまでの対象者は保健委員など、どちらかと言えば健康教育の指導的立場の高校生が多かった。ピアカウンセリングは小集団を対象としたプログラムであることから、集団の属性によってその効果は異なることが予測できる。そこで集団に合わせたピアカウンセリングプログラムを検討する目的で、今回は性行動に問題を抱えていると思われる生徒に焦点をあて、前報³⁾と同様のプログラムによる小集団ピアカウンセリングを実施し、その効果について調べた。

II. 方 法

1. 調査対象者

高校生への思春期ピアカウンセリング講座はA県の健康増進課並びに保健所と協力して実施した。

平成18年9月にA県で開催したピアカウンセリング講座は、養護教諭に性に関する相談をしたことのある生徒を中心にピアカウンセリング講座参加の呼びかけを行ってもらい、自主的に参加を希望した高校1・2年生20名を対象(以下、対象群)に実施した。対象群と比較するための対照(以下、コントロール群)は、平成16年と平成17年に対象を絞らずに各保健所から高校を通じて、“性に関するピアカウンセリング講座一性について話してみませんか”と呼びかけを行い、その呼びかけに対して自主的に受講した高校1・2年生93名とした。

2. 調査方法

調査は自記式質問紙を用い、調査項目は基本属性、性に関する知識・認識・行動に坂野・東條らの一般性Self-Efficacy尺度、RosenbergのSelf-Esteem尺度などを加えた渡邊⁴⁾の「性に関するピアカウンセリング」調査票を基に作成した。受講後調査には受講前調査項目に加え、“ピアカウンセリング講座の中で印象に残っていること”、“ピアカウンセリング受講後自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこと”について自由記載による回答を求めた。

倫理的配慮としては調査票の表紙に本研究の目的と方法を記載し、調査への協力は自由意思であること、回答拒否の権利を有することを明記し、回答の提出をもって同意が得られたものと判断する旨を記した。また分析において受講前後の比較をすることを書面と口頭で説明し、自分が決定した同一の印を受講前後の回答票に記入してもらった。調査票とともに回収用の郵送切手を貼った専用のワンタッチ式封筒を各々の対象者に配布し、個別に回収した。

3. 大学生ピアカウンセラーの養成と思春期ピアカウンセリングの内容

高校生を対象とした大学生ピアカウンセラーは看護学専攻の大学1年生と2年生の希望者に対し平成15年度厚生労働省科学研究「ピアカウンセラー養成マニュアル作成に関する研究」のマニュアル⁵⁾にそって30時間のプログラムを実施し、養成した。

思春期ピアカウンセリング講座の目標は①コミュニケーションスキルの基礎を学ぶ、②自己や他者についての理解を深める、③性について考えとし、総計6時間で実施した。自己や他者についての理解を深めることを目的としたプログラムには構成的グループ・エンカウンターエクササイズを取り入れた。コミュニケーション並びに性に関する知識やスキルについては、寸劇や紙芝居、ロールプレイによって大学生が情報を提示し、それらに対し、最初は高校生が個々に考えてもらい、その後グループワークやディスカッションを通して意見交換を行うことを基本とした。

4. 分析方法

分析は、自由記載に関しては記載された内容によって分類した。

性に関する知識については「正しい」「正しくない」「わからない」で回答を求め、また性に関する認識・行動は「思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」「思わない」「わからない」の5段階で回答を求め、「わからない」と回答した人を省き、順に1～4点の得点を与えた。また、「思う」、「どちらかといえばそう思う」を「思う」に分類して割合を求めた。受講前後の『知り合ってセックスするまでに必要な交際期間について』の比較は「1ヶ月未満」、「～6ヶ月未満」、「～1年未満」、「1年以上」、「セックスしない」、「わからない」の6項目で回答を求め、「わからない」と回答した人を省き、順に1～5点の得点を与えた。

統計的検定は、Self-Efficacy尺度とSelf-Esteem

尺度の平均値の比較はt検定、性交経験率や受講前後の知識の正答率の比較はPearsonの χ^2 検定、性や自己に関する認識・行動についての2群間の比較と知り合ってセックスするまでに必要な交際期間の受講前後の比較はMann-Whitneyの検定を、また性や自己に関する認識・行動についての受講前後の比較はWilcoxonの符号付順位検定を、統計ソフトSPSS 11.0J for Windowsを用いて行い、5%未満を有意差ありとした。

III. 結 果

調査票の回収は受講前が対象群20名、コントロール群93名とともに回収率100%であった。受講3ヶ月後の回収は対象群15名(回収率75.0%)、コントロール群63名(回収率67.7%)であった。

1. 受講者の背景

受講者の属性は表1に示すとおりであり、「1年生」が対象群15.0%、コントロール群26.9%、「女性」が対象群85.0%、コントロール群87.9%、「何でも相談できる友人あり」は対象群89.5%、コントロール群84.9%と有意な差は見られなかった。一方、「現在、彼または彼女がいる」は対象群70.0%、コントロール群19.4%、「性交経験あり」は対象群60.0%、コントロール群11.8%と対象群の方が多く、有意な差があった。受講前の自己効力感尺度の平均得点±標準偏差は対象群が 4.8 ± 2.5 点で、コントロール群は 5.7 ± 3.6 点、また自尊感情尺度の平均得点±標準偏差は対象群が 21.4 ± 2.9 点でコントロール群は 22.0 ± 4.8 点とともにコントロール群のほうが得点は高かったが有意な差はなかった。

受講前後の性や自己に関する認識について、対象群とコントロール群を比較した結果を表2に示す。このなかで、「友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい」と回答した割合は対象群の方が有意に高く、「性交は特定の相手とするものである」は対象群の方が有意に低かった。

表1 思春期ピアカウンセリング講座を受講した高校生の背景

項目	カテゴリー	対象群 (n=20)	コントロール群 (n=93)
		人 (%)	χ^2 検定
1年生	対象群	3 (15.0)	P=0.264
	コントロール群	25 (26.9)	
女性	対象群	17 (85.0)	P=0.722
	コントロール群	80 (87.9)	
何でも相談できる友人がいる	対象群	17 (89.5)	P=0.607
	コントロール群	79 (84.9)	
現在、彼または彼女がいる	対象群	14 (70.0)	P<0.001
	コントロール群	18 (19.4)	
性交経験あり	対象群	12 (60.0)	P<0.001
	コントロール群	11 (11.8)	
項目	カテゴリー	平均点±標準偏差	t検定
一般的Self-Efficacy尺度得点	対象群	4.8±2.5	P=0.309
	コントロール群	5.7±3.6	
Self-Esteem 尺度得点	対象群	21.4±2.9	P=0.505
	コントロール群	22.0±4.8	

表2 受講前の性や自己に関する認識の比較

	対象群 (n=20)		コントロール群 (n=93)
	対象群 %	コントロール群 %	P値
将来の人生の計画は具体的である	30.0	49.5	p=0.115
自分自身のことを自分でよく理解している	65.0	51.6	p=0.965
自分の考えていることをありのままに表現できる	75.0	38.7	p=0.001
自分の性に生まれてよかった	75.0	54.3	p=0.164
異性とつきあうのは相手のことをよく知ってから	70.0	84.8	p=0.245
性交は特定の相手とするものである	55.0	83.9	p=0.010
友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい	40.0	10.9	P<0.001
性交を求められて、気持ちの準備ができていないとき相手に自分の気持ちを伝える自信がある	80.0	72.8	p=0.317

検定はMann-WhitneyのU検定による

「知り合ってからセックスするまでに必要な交際期間」は「1ヶ月未満」が対象群は25.0%でコントロール群は4.3%、「1ヶ月から6ヶ月未満」が対象群40.0%でコントロール群が17.2%と対象群の方が「セックスするまでに必要な交際期間」が短く有意な差が見られた (p<0.001)。

2. 思春期ピアカウンセリング講座受講3ヵ月後の受講者の評価

思春期ピアカウンセリング講座受講3ヵ月後に「思春期ピアカウンセリング講座を受講して良かったと思いますか」の質問に「思う」「どちらかと言えば思う」「どちらかと言えば思わない」「思わ

ない」「わからない」の5段階で評価してもらった。その結果、「思う」が対象群は80.0%でコントロール群は66.1%、「どちらかと言えば思う」が対象群は13.3%でコントロール群は27.4%と、両群ともに約93%が肯定的に評価していた。

3ヵ月後、印象に残っているものや役に立ったプログラムとして対象群では「セクシュアリティ」、「コンドームスキル」がもっとも多く、次いで「避妊」、「性感染症」と性や性交に関することが多かった。一方、コントロール群は「人との接し方・話し方」が最も多く、次いで「性感染症予防に対するブレインストーミング」「セクシュアリティ」「性感染症」であった。また、ピアカウ

セリング受講後、自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこととしては、表3に示すとおり、両群ともにコミュニケーションに関することや性に関する考え方や行動に関する内容があげられていた。

思春期ピアカウンセリング講座の受講時期として最も適切であると思う時期について、中学1年生から高校3年生までの期間を1年ごとに分けて質問した結果、「高校1年生」が対象群26.7%、コントロール群39.0%と両群とも最も多かったが、「中学1年生」が対象群6.7%、コントロール群10.2%、「中学2年生」が対象群20.0%、コントロール群18.6%、「中学3年生」が対象群20.0%、コントロール群15.3%と約半数は中学校の時期が

適切であると回答していた。

3. 思春期ピアカウンセリング講座受講前後の比較

思春期ピアカウンセリング講座受講前後の性に関する知識や認識については、調査票に記載された印で受講前後の比較が出来た対象群15名とコントロール群62名を分析対象とした。

性感染症や妊娠に関する知識の受講前後の比較を表4に示した。受講前の性感染症や妊娠に関する知識の正解率は全般的に対象群の方が低く、「性感染症予防にコンドームは効果的である」については対象群の正解率が有意に低かった ($p=0.025$)。両群ともに受講後の方が受講前に比べ正

表3 ピアカウンセリング受講3ヵ月後、自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこと (自由記載)

(複数回答)

対象群 (n = 6)		コントロール群 (n = 32)	
項目	人	項目	人
規則を守ること	3	人の話を聞く態度が変わった	10
人の話を聞く態度が変わった	2	話し方や言葉に気をつけるようになった	9
相手とちゃんと付き合っていこうと思った	1	相手の価値観や気持ちを尊重するようになった	7
セックスするとき、必ずコンドームを使うようになった	1	セックスに対する考え方や気持ちが変わった	2
避妊について考えるようになった	1	将来や人生について真剣に考えるようになった	2
		物事を考えて行うようになった	2
		相談への対応がわかるようになってきた	1
		けじめをつけて考えるようになった	1
		自分に自信がもてるようになった	1
		生まれた意味について考えるようになった	1
		前向きになった	1

表4 受講前後における性感染症や妊娠に関する知識の正答率の比較

質問項目	カテゴリー	対象群(n=15)		コントロール群(n=62)	
		受講前 %	受講後 %	受講前 %	P値
性感染症予防にコンドームは効果的である	対象群	66.7	85.7	p=0.231	
	コントロール群	85.5	88.7		p=0.592
性感染症予防に経口避妊薬は効果的ではない	対象群	46.7	50.0	p=0.858	
	コントロール群	66.1	67.7		p=0.849
性感染症は口と性器の接触(オーラルセックス)でも感染する	対象群	46.7	57.1	p=0.573	
	コントロール群	38.7	56.5		p=0.048
特定の相手とのセックスでも性感染症に感染することがある	対象群	20.0	42.9	p=0.184	
	コントロール群	質問の設定なし			
一度のセックスでも妊娠する	対象群	66.7	71.4	p=0.782	
	コントロール群	79.0	95.2		p=0.007
安全日のセックスは確実な避妊法ではない	対象群	53.3	78.6	p=0.153	
	コントロール群	59.7	77.0		p=0.038

検定はPearsonの χ^2 検定による

表5 性や自己の認識に関する受講前後の比較

項目	対象群 (n=15)		コントロール群 (n=62)		P値
	カテゴリー	受講前 %	受講後 %		
将来、してみたい職業がある	対象群	53.3	80.0	p=0.026	
	コントロール群	87.1	85.5	p=0.801	
将来の人生の計画は具体的である	対象群	26.7	40.0	p=0.317	
	コントロール群	16.1	30.6	p=0.007	
異性とつきあうのは相手のことをよく知ってから	対象群	73.3	84.6	p=0.666	
	コントロール群	85.5	93.5	p=0.017	
性交は特定の相手とするものである	対象群	53.3	85.7	p=0.026	
	コントロール群	82.0	91.8	p=0.027	
友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい	対象群	46.7	28.6	p=0.190	
	コントロール群	13.1	9.7	p=0.787	
知りあって初めて性交しようとしていると仮定したとき 性交の前に性感染症について考える	対象群	53.3	78.6	p=0.223	
	コントロール群	65.6	82.3	p=0.018	
性交の前に妊娠について考える	対象群	66.7	78.6	p=0.234	
	コントロール群	88.5	91.9	p=0.294	
コンドームを必ず使う自信がある	対象群	60.0	78.6	p=0.190	
	コントロール群	67.2	85.5	p=0.004	
コンドームを正しく使う自信がある	対象群	46.7	57.1	p=0.242	
	コントロール群	29.0	51.6	p=0.003	

検定はWillcoxonの符号付順位検定による

表6 受講前後の一般的Self-Efficacy尺度得点とSelf-Esteem尺度得点の比較

項目	カテゴリー	受講前		受講後		P値
		平均点±標準偏差	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差	
一般的 Self-Efficacy尺度	対象群(n=15)	4.5±2.6	5.2±3.1	p=0.007		
	コントロール群(n=62)	5.5±3.5	6.7±3.8	p=0.001		
Self-Esteem 尺度	対象群(n=15)	21.4±3.3	21.9±3.8	p=0.064		
	コントロール群(n=62)	22.2±4.6	23.4±5.7	p=0.049		

検定はt検定による

答率が上がっており、変化の差はコントロール群の方がより大きかった。

性や自己の認識に関する受講前後の比較を表5に示した。性や自己に対する認識についてもコントロール群の方が対象群よりも前後の変化が大きかったが、対象群では「将来、してみたい仕事がある」、「性交は特定の相手とするものである」と回答した者の割合が受講後は有意に増加していた。また有意な差はなかったが、対象群の受講後は「異性とつきあうのは相手のことを良く知ってから」、「知りあって初めて性交すると仮定したとき」に「性交の前に性感染症について考える」「性交の前に妊娠について考える」「コンドームを必ず使う自信がある」「コンドームを正しく使う自信がある」と回答した者の割合が増加している一方で、「友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい」は減少していた。

「知り合ってから性交までに必要と考える期間」は両群ともに受講後の方が受講前より長くなっていった。対象群の「知り合ってから性交までに必要と考える期間」の受講前後を比較した結果を図1に示した。受講後には「1ヶ月未満」と回答した者はいなくなっており、受講前に比較し期間が延びており有意な差がみられた。

受講前後の一般的Self-Efficacy尺度とSelf-Esteem尺度の違いを表6に示した。一般的Self-Efficacy尺度は両群ともに受講後の方が有意に上

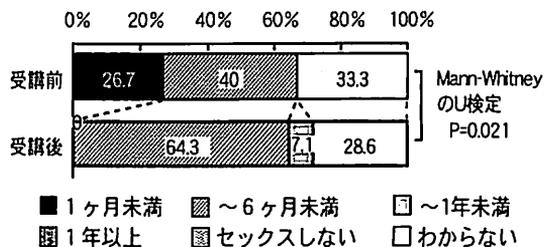


図1 対象群の「知り合ってからセックスするまでに必要な交際期間」の比較

昇していた。またSelf-Esteem尺度の得点も両群ともに受講後の方が上昇しており、特にコントロール群は受講前後で有意な差が見られた。

IV. 考 察

1. 思春期ピアカウンセリングの性に関する知識ならびに認識・行動への影響

対象群とコントロール群の受講前の対象者の比較から、学年や性別などの属性に違いはなかった。しかし、性行動に関しては対象群とコントロール群に有意な差が見られたことから、平成18年度の対象者の募集は本研究の意図を反映した対象者となっていたと判断できる。平成18年度の対象者は、平成16年のA県の高校生を対象とした調査と比較しても、性交経験率や特定の交際相手がいる割合が高かった⁶⁾。対象者群の性交経験率が高率であったことは、「現在、彼または彼女がいる」や「友達が性交を経験していたら自分も経験したい」と回答した者の割合が高いことや「性交は特定の相手とするものである」の割合が低かったことと関連していると考えられる。

A県では本講座を平成13年度から開催している。受講して「良かった」と回答した者が両群ともに約93%であり、他県の類似のプログラムの結果でも同様に高い評価であったことが報告されている⁷⁾。これらのことから、講座の内容は高校生全般のニーズに即していると判断できる。講座の中で印象に残っている項目は対象群では性や性交に関することが多かったが、受講後に変化したことや気をつけるようになったこととして記述された内容は両群とも対人関係に関することや性に関することがあげられていた。思春期ピアカウンセリングのプログラムにはコミュニケーションについて考える内容や構成的グループ・エンカウンターエクササイズを含んでいる。構成的グループ・エンカウンターエクササイズは自己理解を促し、コミュニケーションを通じた他者受容や信頼体験を得ることができ、人間関係作りを学ぶ機会とな

る⁸⁾。今回の結果から人間関係を基盤とする性教育に構成的グループ・エンカウンターを取り入れることは意義深いといえる。

受講後は対象群、コントロール群ともに避妊や性感染症に対する知識の正解率が全般的に上がっていた。それに加え、将来の人生の計画などの項目に対する肯定的な回答の割合も増加していた。対象群では「性交は特定の相手とするもの」の割合が有意に増加しており、有意な差ではなかったが「異性とつきあうのは相手のことを良く知ってから」が増加し、「友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい」が減少したことは、性感染症予防の側面から考えると好ましい方向に変化したといえる。

両群ともに「知りあって初めて性交すると仮定したとき」「性交の前に性感染症について考える」「性交の前に妊娠について考える」「コンドームを必ず使う自信がある」「コンドームを正しく使う自信がある」と回答した者の割合が増加していた。さらに対象者群の「知り合ってからセックスするまでに必要な交際期間」も有意に延びていたことから、本講座は性交するかしないかの判断やコンドーム使用の意思決定に影響を及ぼすことが示唆される。

2. 思春期ピアカウンセリングのSelf-EfficacyやSelf-Esteemへの影響

行動に対するSelf-Efficacyは、行動の活性化や修正と大きく関連しており、行動選択に直接的な影響を及ぼす⁹⁾。有意な差ではなかったが、受講前は対象群よりコントロール群の方がSelf-EfficacyやSelf-Esteemが高かった。Self-Efficacyを高めるための方法としては「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的賞賛」「衝動的喚起」があげられる⁹⁾。思春期ピアカウンセリングで行うロールプレイは高校生にとって「遂行行動の達成」の体験につながり、構成的グループ・エンカウンターや仲間との話し合いは「代理的経験」や「言語的賞賛」につながる。受講後に両群ともにSelf-

Efficacyや性に関する認識が好ましい方向に変化していたことから、思春期ピアカウンセリングで体験する「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的賞賛」によって自己理解が深まって自分自身に対する認知の再構成が行われたものと推測する。

またSelf-Esteemは自分自身を好ましい人間、自分の行動を積極的に価値のある者として評価する個人の自己の価値についての知覚であり、社会的適応行動や建設的な行動に影響を及ぼす¹⁰⁾。今回実施した思春期ピアカウンセリング講座では、グランドルールとして相手の言動を批判せず、共感的態度で接することを講座の最初に説明する。このルールを参加者が守ることによって仲間から受容され、支持される場を作ることができる。さらにプログラムの中には参加者それぞれの良いところや価値のあることを積極的に発見し、それを伝えるようなポジティブ・フィードバックが含まれている。ポジティブ・フィードバックによる仲間からの受容や支持は、自尊感情の形成と変容をもたらすといわれる¹¹⁾。

今回の結果から対象群とコントロール群では類似の結果が得られたが、よりコントロール群の方が変化は大きかった。講座の中で印象に残っていることとして対象群の方が性や性交に関することが多くあがっていたにも関わらず、知識の習得はコントロール群よりも低かった。仲間は良好な影響をもたらすことがあるが、時には「友達が経験していたら自分も早く経験したい」といったピアプレッシャーとして働くこともある。また性交経験者の方が未経験者に比較して自尊感情が高く、女子高校生にとって性交経験や異性と交際することは自分の存在を確認する重要な機会となっているが、「恋人からの無理やりセックス」などの経験者では自尊感情が低いことが報告されている¹²⁾。思春期は周囲の人々との良好な人間関係を築き、一人の人間としての社会的役割を果たすための準備期間であり、仲間との出会いは重要な人間関係の基盤となる。本研究の結果から、思春期ピアカウンセリングは性行動に問題を抱えていると思わ

れる高校生にとってもコミュニケーションスキルを修得する場となっており、対人関係や自己理解、人生に対する認識を深める機会となったことが示された。ただし、コントロール群に比べ効果が低かったことから、今後、さらに自己理解やコミュニケーションスキルを高められるような内容を検討していくことが必要である。

最も適切な思春期ピアカウンセリングの開催時期については中学生のときと回答した高校生が約半数であったことは、性に関する諸問題が低年齢化していることが影響していると考えられる。社会的な現状を考えると、性に関する知識の定着を図るには中学生の時期から類似したようなプログラムを導入し、頻回に教育の機会を設けることも必要だと考える。

V. 結 語

今回実施したピアカウンセリングは性行動に問題を抱えている高校生に対しても性感染症予防の知識や意識の変化をもたらすことが示された。そしてこれらの効果は受講後3ヶ月以上維持できていることもわかった。

本研究の限界は対象者が少なかったことや、思春期ピアカウンセリング受講後の行動の実際を把握することまでは及ばなかったことである。コントロール群に比べ、対象群の方が受講前後の変化が小さかったことから、今後さらに対象者に合わせた開催時期、講座の頻度などの検討や受講後の行動評価の指標の開発が必要である。

謝 辞

調査にご協力頂きましたA県の思春期ピアカウンセリング講座の受講生の皆様、思春期ピアカウンセリング講座を主催いただきました保健所の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 「健やか親子21」推進検討会：「健やか親子21」中間評価報告書，8-11，「健やか親子21」推進検討会，東京，2006。
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/dl/s0316-4a.pdf>
- 2) 高村寿子：今，なぜピアカウンセリングなのか，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアル ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，10-18，小学館，東京，2005。
- 3) 前田ひとみ他：高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価（I），南九州看護研究誌，11-18，2007。
- 4) 渡邊至：ピアカウンセリングの評価 高校生の評価，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・ピアエデュケーションマニュアル ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，148-156，小学館，東京，2005。
- 5) 堀内成子他：ピアカウンセラー養成マニュアル作成に関する研究，平成15年度厚生労働省科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書，536-559，2004。
- 6) 宮崎県性教育研究会：平成16年度・17年度「性に関する調査」結果，44-49，2006。
- 7) 渡邊至：「性に関するピアカウンセリング」による思春期の性行動に対する認知行動療法的アプローチ，思春期学，23，295-299，2005。
- 8) 片野智治：構成的グループ・エンカウンターの特徴，構成的グループ・エンカウンター，10-33，駿河台出版社，東京，2003。
- 9) Bandura, A: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychological Review, 84, 191-215, 1977.
- 10) 遠藤辰雄：セルフ・エスティーム研究の視座，セルフ・エスティームの心理学，8-25，ナカニシヤ出版，京都，1992。
- 11) 蘭千壽：セルフ・エスティームの変容と教育指導，セルフ・エスティームの心理学，200-226，ナカニシヤ出版，京都，1992。
- 12) 財団法人 日本性教育協会編：「若者の性」白書，135-138，2007。